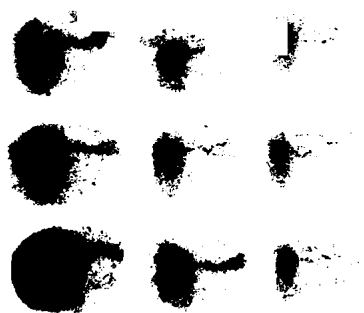


有吉佐和子

芝
櫻
(下)

有吉佐和子
芝櫻
(下)



芝^は
櫻^{ざくら}
下

有吉佐和子選集(第二期)第五卷

昭和五十三年一月二十日 印刷

昭和五十三年一月二十五日 発行

定価 九五〇円

著者 有吉佐和子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町71

電話 編集部 03(266)5111

振替 東京 四一八〇八番

印刷 凸版印刷株式会社

製本 株式会社大進堂

© by Sawako Ariyoshi, 1978, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

芝

櫻

(下)

装
幀
李
禹
焕

第二章 まだら猫(承前)

十四

ゝ染めにし筆も うきくさ 萍の

流れて消ゆる ゆきがすみ 夕霞

ゝおもしろや おもしろや

天の川瀬に洗ひしは 秋の七日の衣なり

えいせんに耳を洗ひしは

濁れる世をぞ 澄ましける

皮製の張り扇で、踊りの師匠は癩性かんじょうに前の二月堂を叩き鳴らした。

「違う、違う、違うよッ。今日はお前さん、まるでどうかしているよ」

稽古場の床に両手を突いて、正子は子供のようにうなだれていた。

「えいせんに耳を洗うってのはね、支那の偉い人が、濁ったことを聞いたんで、川で耳を洗った

ときの話なんだよ。耳を、洗ひし、は、とこう、耳から入って躰全部からだをけがしたものを、耳を洗うことで除くのだから、もっと躰全部で嫌あなことを抱えてるっていうのを、洗って捨てたいって氣になんきゃ」

正子は、はっとして顔をあげた。それなら今の私に踊れない筈がない。

「分りました。もう一回お願いします、お師匠さん」

「本当に分ったのかい？　いつものあんたのようじゃあないよ」

師匠の言う通りであつた。正子はこの数日、まるで生きているような氣がしていない。躰中の張りが、失せてしまっている。お座敷は病氣と言つて、全部休んでいた。戦場へ出るために厚化粧と華麗な衣裳いしやうで身を鎧よろいう元氣もない。

ただ、正子は根が芸事好きだし、ぼんやり暮していても仕方がないからと、踊りの稽古日だけは、稽古着に帶をきつめに締めあげて出てくるのだった。

しかし師匠が言つたように、踊ってみると、手も足も、いつもの稽古のときとは別人のように動かない。踊っているのが「六歌仙」の一つだということに、まず心がこだわっていたからである。男の芸名を織りこんだ外題げだいいに魅かれて習うときめた「六歌仙」であつた。別れると心を決めた今は、とても踊れるものではない。

しかし、堯ぎやうの許由が濁つたことを聞いた耳を潁水えいすいという川で洗つた故事を、踊りの師匠が説明したとき、正子の耳はそのとき文字通り洗われるようであつた。

もう一度、立って踊ってみると、なるほどいい振りがついている。洗うということの意味を、正子は改めて味わっていた。

「春の歌を洗ひては　霞の袖を解かうよ

冬の歌を洗へば 袂たもとも寒き水鳥の

上毛の霜に洗はん。

「そうだよ、そういう風だよ。なんだい、踊れたじゃないか」

師匠に褒めてもらって、稽古場を出ると、もう昼が近くて、表は夏のような陽気だった。ハンカチで額の汗を拭きながら、洗うという言葉を口の中で繰返していた。いつのまにか長唄の文句を口ずさんでいて、時雨に濡れて洗ひしは、紅葉もみぢの錦なりけり……と唄いながらも、実のところはまったくぼんやりしていて、これから先をどうすればいいのか、まったく分らない。

芸者は、やめる。江藤と別れ、歌仙とも別れてしまう。津川家やを早急にひきはらって、木挽町こひきちょうの宿屋に移っていく。

段取りはきまっているのだが、歌仙と結婚するという大きな目標を失ってしまったので、歌舞伎座のある木挽町を選んだ理由も浮いて、すでに手金は打ってあるものの、正子の方はエンジンがかからない。ともかく芸者をやめるのだ、と正子は自分に言いきかせた。養うべき縁故の者もなく、自分一人の身すぎには、どうしたって生きていける。歌仙さえいなければ、津川家も赤字なしでやってこられたのだが、それを今思うのは愚痴だ。

芸者をやめるのだから、何より津川家の処分を考えなければならぬ。妻子ある金持の女にだけは二度と戻りたくないし、主従師弟の順のきびしい役者の世界も正子には我慢のならないところだった。歌仙に、未練はなかった。それは不思議なくらいで、心変わりというのは、こんなに憑つきものが落ちたようにあつけられかんとするものかと、正子は自分でも可笑おかしい。おもしろや、おもしろや、天の川瀬に洗ひしは、秋の七日の衣なり……。

「やあ」

すぐ目の前に、思いがけず男の顔があつて、それが強い日射しの下で、眩し^{まぶ}そうに正子を見ている。小森であつた。

「まあ、お兄さん」

すぐに分らなかつたのは、彼が流行のカンカン帽をかぶっていたからである。お座敷で会うときは、よほど大きな宴会でない限り、小森は着流しだったから、三つ揃^{ぞろ}えを着て、帽子をかぶっているところは正子には珍しい姿に見えた。

同じことが小森の方にも言えたようである。お座敷で出会う梅弥は、髪飾りも多くて、着物も帯も眩^{まぶ}しいようだが、昼日中に街で行き合つた正子は、稽古のあとで髪もほつれていたし、第一、着ているものが違う。お召に黒緇^{くろじゆす}子の衿^{えり}をかけて、足袋の袋と扇子入れを持ち、盛装して迎りを払うような威容を示す売れっ妓^この面影はなかつた。

「珍しいところで会つたものだね。稽古先はこの辺かい？」

「ええ。それより、お兄さんこそ、どうしてこんなところを歩いていらっしゃるんです？」

「車がエンコしちまつたのさ」

「え？」

「仕方がないからぶらぶら歩いてた。なに、急ぐ用もないのでね」

小森はチョッキのポケットを探つて金の懐中時計^{ぶちうけい}を取出し、針を読んだ。

「ばかに陽氣がいいと思つていたが、もうじき十二時^{じふにじ}だねえ」

「まあ、もうそんな時間ですか」

「君は急ぐのかい？」

「いいえ」

「じゃ、ちょっとどこかで腹^{こしら}を拵えようか」

小森の後を、正子は黙って歩いてゐた。男女が並んで歩く時代ではなかったし、こんな不意の出会いが、やがて正子の人生を左右するようなことになるとは思ひもよらなかったから、小森もさりげなく飯に誘つたのだし、正子も地に足のついていないときで、深い思慮もなく従つていた。「君、この辺に知つた店はあるかい？」

「いいえ」

下町で、小料理屋が通りごとに一、二軒はあるという一劃に出てから、小森は訊いたが、正子は知らなかった。稽古場からの帰り道に、芸者同士で寄り道して、お茶漬を食べたり、お汁粉を奢りあつたりする店はあるのだけれども、小森と歩いているのはまるで方角違いで、正子が滅多に足を踏み入れたことのない町並である。

「銀座に出ようかね」

「こんな装束で私の、私」

梅弥といえ少しは聞えた芸者なのだから、まさか稽古着姿で銀座を歩くこともできない。

ちよつと小粋な店構えで、「磯料理」などという看板を出している前に立つて、小森は正子を振返つた。

「こんなところで、どうだい？」

「結構ですね、お兄さん」

返事をしながら、正子は、きゅっきゅつと喉の奥で笑つた。小森が、いちいち正子の顔を見て、ものを訊くのが、まるで小さな男の子のようで可笑しかったのである。笑いながら店の中へ入つて、ああ、久しぶりで笑つたと気がついた。

昼のせいか、客は正子たちだけで、小さな店は閑散としていた。座敷が三つほどの、文字通りの小料理屋だが、掃除が行届いているようで快かった。

一番大きな座敷というのが六畳で、床の間には安物の軸がかかり、それが飴色がかった鮎の絵で、置物は大きな今戸焼の狸だったから、出てくる料理がどの程度のものか、注文を出す前から正子には見当がついた。

「何があるんだ」

小森が店のものにきいて、三つ四つの料理を注文し、

「御酒は何にいたしましょう」

と訊かれて正子の顔をみた。

「何にしよう、暑いから麦酒をもらおうか」

正子あまり飲まないのを知っていて、こう訊いたのだが、

「お兄さん、私は御酒が頂きたいわ。できたら枧酒ね」

と答えたので、目を瞠った。

「枧はあるのかい？」

「へい、ございます。うちは地酒が樽で来てますのが自慢で」

「そうか。じゃ、僕も冷やで飲むとしよう」

料理が揃わないうちに、大中小三つの枧を重ねたのと、四合入りの大徳利が、粗末な卓袱台の上に置かれた。

「本当に飲むのかい？」

「ええ、頂きます」

小皿の塩をとって枧の角に盛り、唇を突き出して一口飲んでから、

「正月が二度来たようだな」

小森は顔を綻ばせて上機嫌だった。花柳界の正月は、冷酒を枧で飲むのが習慣で、そう言われ

てみれば、正子も枡酒は松の内以来だ。一息に飲み干して眼を瞑ると、ずっと胸の中を酒が走り、やがてぽっと熱いものになってひろがってくるのが分る。稽古で汗を掻いたあとだから、酒のまわり方は早そうだった。正子の持った小さな枡に、小森が大徳利を片手で持上げて酌をした。

「お兄さんも干して下さいよ」

正子は両手で徳利を持上げて、その重いのに驚いていた。

「俺のは大きいんだぜ」

「だって、お兄さんは男でしょう」

「よせよ、昼日中っから酔ってしまう」

「酔いましょうよ、たまにはいいじゃありませんか」

「よしよし」

小森は、にこにこしながら、枡を口に運び、勢いよく飲み始めた。

料理がきた。正子たちの出るお座敷などとは違って、分厚い瀬戸物に、なんでもどきっと入っている。もずく、若布の酢のもの、鮪のぶつ切り、と運ばれてきたものを眺めて、正子はすぐには手が出なかった。海草類はともかくとして、鮪があまり新しくない。ごく庶民的な店なのだから、それは当然というものだったが、小森が箸をとって、もずくを一息で吸いこむように食べてしまい、その勢いで鮪に箸を出そうとしたとき、

「ちょっと待って、お兄さん」

正子は思わず止めていた。

ちょうど榮螺の壺焼きが運ばれてきたところだった。

「ほう、榮螺か、久しぶりだな」

小森は食べものに目のない方らしい。鮪はやめて、すぐに榮螺に手を出した。大皿に、一人当

り五個ものせてあるのだから、凄^すい。しかし磯の香が高く、巻貝もごつごつと大きくて、まるで江の島へでも出かけたようだった。

「あら、この栄螺、本ものだわ」

「本ものは、よかった」

小森が笑い出した。正子の驚きも無理はないのである。お座敷で出る料理は、悪く言えば手が入れすぎてあって、たまに季節には壺焼きが出て、それは茹^ゆでて身をとって、それを刻んで、三つ葉や魚などと味つけし直して巻貝に納め直したものである。ところが、この店の壺焼きは磯料理と銘^{めい}うった通り、活きている栄螺をいきなり火にかけて、醤油をさして焼いた素朴なものであった。生きていた証拠には、貝の蓋がびったり貼^はりついていて、先ずこれをはがすのが容易ではない。小森は箸の先でこじあけながら、

「こいつは堅いや。なかなか取れない」

一生懸命で、やっとはがすと、箸の先を、ぐさりと突^つこんで中身をひっぱり出し、一口にほうりこんで、

「うん、これは旨^{うま}い」

熱いので舌を動かして口の中を転がしながら、喜んでいる。

「お兄さん、それはワタが途中で切れてますよ。まあ、なんて無器用なのかしら。私が取ってあげますよ」

正子は蓋を外すと、箸の先で身を摘^{つま}んでひっぱり出し、くるくると巻貝の方を手の中で巻くようにして栄螺の身を最後まですっぱり引き出してみせた。

「うまいものだな」

「はい、召上れ」

貝のまま受取って、口へ入れると、

「旨い、本ものの味だ」

小森は両手をあげる真似をして感激している。正子は、くすくす笑いながら、次々と榮螺の身をとっていった。ときどき調子があまくいかず、ワタが途中で切れてしまう。

「おや、しまった」

「やっぱり難かしいものなんだね」

「待って下さい。はい、今度はうまくいきましたよ」

そんな具合で気がついたら失敗した分を除いて、小森は自分の分も正子の分もぺろっと平らげてしまっていた。なんとという健啖けんたんだろう。榮螺などというものは、一気に十個近くも食べられるものではないのだ。

「お兄さんって、大喰いなんですなえ」

「そうなんだよ、育ちが悪いんだね。恥ずかしい、恥ずかしい」

「そんなことありませんよ、大きな仕事をなさる方は皆さん大喰らいですよ。頼もしいわ」

「俺はこのオカズばかり喰うのが性に合わないんだね。いくら喰っても腹にたまった気がしない。やっぱり飯は、米の飯が一番うまいな」

「もらいましょうか、お兄さん」

「うん」

御飯と漬物と、他に二品ほど料理の追加を注文してから、また鮪に箸を出そうとするのを正子は止めて、部屋にある火鉢にかけてある鉄瓶をさわってみると、熱い。

「ちょっと待って下さいよ、お兄さん、火があるようですからね」

火鉢を二人の間に引き寄せて、鉄瓶をどけ、火箸で火を掘り起して、そこへ空になった榮螺を

かけた。小森の吸物の残り汁を入れ、煮たったところで鮪の切身を落した。醤油をさして味をつけた。

「ほほう」

「お味、どうかしら」

鍋が小さいから、一切れずつしか煮ることができない。御飯が運ばれてきたので、小森は早速、それをオカズにして旨そうに御飯を食べ始めた。

正子は途中で、ちよつと箸の先を舐めてみて、栄螺の中に酒をたらしした。

「夢のような気がするな」

「あら、何が」

顔をあげると小森が眩ゆそうに正子を見て、小さな声で続けた。

「君と二人で飯を喰うなんてことが、あろうとは思わなかった」

「どうして、お兄さん」

「僕ひとりの座敷だったら、決して入って来なかったじゃないか」

「そりゃ、あのときは麻雀だったでしょう？」

「麻雀とか花札とか、そんな口実がなくては会ってもらえなかったよ」

「そういえば、お花もお兄さんに手ほどきしてもらったんでしたねえ」

「俺なんかには高嶺の花で、こうやって魚を煮てもらえるときがあらうとは夢にも思わなかった。

君は案外、家庭的なところがあるんだね。実に意外だよ」

「堅気になって、誰かの奥さんになるのが、長い間の夢だったんですもの」

「その夢が、もうじき稔るって噂だねえ。いつだい？」

「やめました」

「え？」

「芸者はやめるつもりなんですけど、相手があるわけじゃないんですよ。私は今んとこ、宙に迷っているんです」

「江藤さんは……」

小森の声がかすれていた。

「旦那には、おひまをもらいます」

栄螺の中で、鮪が煮詰って、醤油のこげる匂いがしてきた。あわてて摘み上げて、気がついた。小森は食べかけの茶碗も箸もおいて、じっと正子を見詰めている。

「ひとり身でやっていくつもりかい？」

「ええ、仕方がないんですよ。芸者でいれば、どうしたって妻子も二号もあるような、そんな人しか寄ってきませんもの」

「僕は妻も子も二号も、ないよ。その代り、名誉も、金もない」

「……………」

「はは、ないないづくしだが」

「……………」

「今夜、呼んだら一人で来てくれるかい？」

はっとして顔をあげた。正子の眼は潤んでいたが、勝気がわざわいして言わでものことを言っていた。

「私は芸者はやめたいんですよ。そう言ってるのに、あなたは私を芸者扱いになさろうって言うんですか」

「よし」

小森は勢いよく言った。

「それならこれから熱海あたりまで突っ走ろうじゃないか」

「道行きですか、お兄さん」

「なに、俺は役者じゃないから、そう粋にはいかないやね。駈け落ちさ」

駈け落ち。いいじゃないか、と正子は思った。小森に歌仙のことが多少のこだわりになっていて、道行きという言葉を嫌ったのが、却って正子の心を強く引き寄せていた。いい人なのだ、と正子は思った。運命が、思いがけないところで正子を招いている。そこへ飛込むのに、正子にはや遡^{たもと}わなかった。

十五

江藤は、苦りきっていた。

いずれ来る破局だとは分っていたし、気の強い正子のことだから、自分で口上を言いに来るだろうとは思っていた。しかし、どこの国に芸者から旦那^{みだちはん}へ三行半を突きつけるという話があるだろう。そうなる前に江藤は手を打ったつもりだった。そのために金もかなり使った筈なのに、すべては甲斐^{かい}なかったのだ。

「そうか、芸者をやめて、宿屋をやるのか。結構だね」

「宿屋？」

正子は問い返して、やはり苦笑いをした。江藤に宿屋を買う相談は何もしていなかった。誰かが告げ口してあったのだろう。

「宿屋の方は、やるかどうか、まだきめていないんですけれど」